

## 令和 8 年度 入学 試験 問題

## 小 論 文

## 注 意 事 項

1. この問題冊子は試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
2. この冊子は全部で 16 ページあります。
3. **I** , **II** の全 2 問に解答してください。
4. それぞれの問題について解答用紙が配布してあります。この他に下書用紙も配布してあります。解答用紙には受験番号を記入する欄がありますが、下書用紙にはありません。間違えないようにしてください。
5. 受験番号は解答用紙の指定された箇所に記入してください。決して氏名を書いてはいけません。
6. 算用数字とアルファベットは解答用紙の 1 マスに最大 2 文字まで書くことができます。
7. 試験終了後、解答用紙を回収します。
8. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。





**I**

次の①～③の文章は、学術的な調査研究や知識・文化の継承にあたって重要な資料群の保全に関する話題を取り上げたものである。これらを読んだ上で、以下の設問に答えなさい。なお、解答は、全て原稿用紙の使い方に従って作文すること。(配点 100 点)

## ①

日本の地域に残されている歴史資料は、江戸時代のものが多い。なぜそうなるかという点、多くの文書が作られる条件が江戸時代に整ったからである。戦国時代が終わり、幕府や藩といった官僚的機構が整備されることで、文書による執務・統治が可能になり大量の文書が作られた。なお、作成者が特定の他者へ意志を伝えるために作成したものを、さしあたり「文書」とよんでいる。

貨幣経済の浸透と商品流通の発展による影響も大きい。商取引に係る証文、経営や資産に関する記録、奉公や小作に関する契約書類など、商業に関する文書がそれまでに比べて大量に作成された。また文書のやり取りが増えるにしたがい読み書きを学ぶ人々が増え、さらに多くの文書が作られる素地になった。

では、文書が今日まで残るのはなぜだろうか。

江戸時代では、村や家が今日の私たちの社会とは異なる意味をもっていた。現在では、税金は個人・法人が払うが、江戸時代は村が連帯して年貢を領主に納める責任をもっていた。また、家は代々継承される家業と財産をもって永続する組織で、村や町を構成する基本単位であった。村にとっての年貢割付状(年貢高を村に通達した文書)や、自家の土地所有を証明する文書は、自らの権利を証明する重要な書類であるだけでなく、その村や家の歴史を語る「存在証明」であった。ゆえに、それらの文書が行政事務上必要でなくなったとしても、廃棄せずに村や家で保存された。

村の「存在証明」となった文書は、江戸時代では庄屋が代々保管した。ただ庄屋は、1872(明治5)年に明治新政府によって廃止されてしまった。また、村も地租改正を経て年貢の納入主体ではなくなり、それまでの意味を失った。しかし、村の文書は「存在証明」であるがゆえに、新しい行政機関に引継文書として継承されたり、庄屋だった家にそのまま残されたりした。さらに1888(明治21)年に公布

された市制・町村制で、旧来の村が合併されて新たな村が多く誕生した。そのとき旧来の村は大字や区という単位になったが、生活の単位や自治体運営の末端として意味をもった。江戸時代以来の村の文書はこの大字・区に引き継がれ、さらに大字に関係する明治以降の記録が付け加わって、近世・近代にまたがる資料群を形づくった。これらは現在公民館に伝わっていたり、区長に代々引き継がれたりして保存されている。このような歴史資料は区有文書とよばれ、その地域の歴史を語る貴重な財産となっている。

保存される歴史資料がある一方で、捨てられるものもある。ここでは、日本社会の変化にともなって、歴史資料がいっせいに散逸した3つの契機をみてみたい。

第一の契機は、アジア・太平洋戦争による影響である。戦時中の空襲や原爆による焼失、戦時疎開の混乱によっておびただしい量の歴史資料が失われた。戦火を逃れたものでも、終戦後は人々の生活苦や物資不足による古紙需要の高まりのため、紙資源として売買されたものも多かったという。

また敗戦によって、それまで人々がもっていた(もたされていた)自国の歴史に対する自信が失われたことも、歴史資料が売られる理由のひとつだった。農地改革によってそれまでの地域秩序が変わってしまい、地主(しばしば江戸時代の名主だった)が自分の家や、その家を含み込んだ地域の歴史にかかわる歴史資料を手放してしまったこともあったという。

第二の契機は、高度経済成長である。産業構造の変化にともなって、農村から都市、特に三大都市圏への大規模な人口移動が発生した。この結果、多くの農家で歴史資料を受け継ぐ後継者の不在を招いた。後継者がいない家では、親世代の死去にともなって家が整理されるさい、処分されてしまうことも少なくなかった。また高度経済成長によって農村で農家改築ブームが起こると、古い土蔵が取り壊されて中に保管されていた歴史資料が廃棄されてしまうこともあった。

第三の契機は、1990年代以降日本列島で続発する大規模自然災害である。津波・洪水・火災などは、歴史資料を物理的に消滅させてしまう。また、無事な場合でも、住宅が被害にあった場合、解体や改築をきっかけとして捨てられてしまうこともあった。被災家屋の解体に対し公的資金を援助する制度が設けられると、それが期限付きであるために家屋の解体を加速化させ、そこに保管されてい

た歴史資料が失われてしまうこともあった。

しかし散逸の一方で、歴史資料を守ろうとする動きも生じていた。

前述したように、敗戦直後に多くの歴史資料が廃棄・売却された。このことに危機感を抱いた公官庁や研究者は、地域に残された歴史資料の全国的な保存活動を始めた。1948(昭和23)年に文部省の特別研究費によって始まった近世庶民史料調査事業は、その代表的なものである。

次いで1956(昭和31)年から始まる「昭和の大合併」によって、公文書が廃棄されるという問題が起ると、歴史資料保存機関の設立運動がさかんになった。また1950年代の町村合併や「明治百年」などを契機に、多くの地方自治体が「自治体史」を作りはじめた。自治体史編纂が始まると地域に残された歴史資料の調査が進められ、その保存に大きな役割を果たした。

自治体史の編纂は1980年代以降も各地で行われた。高度経済成長期を終えて変容した地域社会を記録することがひとつの理由であった。このときも多くの歴史資料が調査・収集され、その保存に重要な役割を果たした。

しかし、自治体が歴史資料を集めたり自治体史を作ったりしても、市民がそれを読んだり歴史資料保存機関を利用することは少なかった。つまり多くの市民は歴史研究者から研究成果を一方向的に与えられる存在で、歴史資料から縁遠かった。

この問題を歴史研究者が改めて考える契機になったのが、1995(平成7)年に発生した阪神・淡路大震災であった。震災を契機に始まった史料ネット<sup>(注)</sup>による歴史資料保全活動の中で、歴史研究者は「何が歴史資料か」について市民と認識の齟齬<sup>そこ</sup>を感じるがあった。歴史研究者は歴史資料をビラや写真など市民の日常生活の中から生まれるものだと考えていたのに対し、市民は特別な価値をもつ指定文化財のようなものだとイメージすることが多かった。その場でそのことを説明すれば市民には理解してもらえるのだが、この経験は歴史資料保全活動が市民に歴史資料のイメージとその意義を伝える日常的な活動へと展開していくことになった。

たとえば、市民がボランティアとして被災した歴史資料のクリーニングや襖<sup>ふすま</sup>の下張り剥がしに参加したり、市民自身が地域の歴史についての展示にかかわったり、あるいは市民自ら自治体史を執筆するなど、様々な実践が展開した。ここ

では歴史研究者は市民との双方向的関係を目指し、また市民に対して、歴史資料が多様なものであり、そこから地域の歴史像が創り出されるという認識を共有してもらおうとした。

歴史資料にかかわる機会を市民がもつことは、廃棄からそれらを守る可能性を高めることにもつながる。市民が指定文化財＝歴史資料という認識では、たとえば大規模災害のさいに、自宅に残された歴史資料を「歴史資料」と思わず廃棄してしまうかもしれない。しかし、自分たちが何らかのかたちで歴史資料にかかわっていたならば、廃棄の前に「これは大事なものかもしれない」と踏みとどまってくれる可能性が高まる。

そうだとすれば、地域の歴史資料を未来につなぐために必要なことは、歴史研究者と市民が協働する仕組みであろう。そのさい行政も、コーディネーターとしての役割が期待される。こういった仕組みによって、歴史資料は歴史像を紡ぎ出すためだけでなく、歴史資料にかかわる人々(市民、行政職員、歴史研究者など)をつなぎ直す意味をもつ。そしてこのような取り組みを広げることが、地域に残された歴史資料を未来に伝えるために必要なことなのではないだろうか。

(三村昌司「地域歴史資料概論 なぜ今に伝わり、これからどう残すのか」『REKIHAKU』010, 2023, pp. 31-36 より。一部改変・省略あり。)

注…史料ネット：阪神・淡路大震災をきっかけとして立ち上がった「歴史資料ネットワーク」の通称。市民や歴史研究者、行政などが相互に連携したボランティア活動で、被災地を中心とした多様な資料の保存・継承を目指して活動する組織。

## ②

三重県鳥羽市のリサイクル施設に持ち込まれた紙ごみの束から、江戸時代に暴風雨に見舞われた鳥羽城石垣の被災状況を幕府に報告した「修復願絵図」が発見された。紙ごみを仕分けしていた施設作業員が「価値のある史料かも」と機転を利かせ、鳥羽郷土史会に持ち込み、同会を偶然訪れた研究者が「探していた未発見絵図だ」と確認。海に面した鳥羽城がどう災害に立ち向かったのか、その記録が鮮やかによみがえった。

7月13日、家庭から出るリサイクルごみの受け入れなどを担う「鳥羽市リサイ

クルパーク」を、名古屋市在住の50代男性が訪れた。持ち込んだのは、史料の束や写真のネガ、古いパンフレット類などが入った段ボール箱。親が住んでいた鳥羽市内の空き家を整理した際の処分品だった。

(「ゴミの中から鳥羽城の未発見絵図 災害史研究のマスターピースを地域の関係プレーで救出」『産経新聞』2024.12.7記事より抜粋。)

③

国立科学博物館(東京・台東)は6日、運営に必要な資金を集めるクラウドファンディング(CF)<sup>(注)</sup>で約9億2千万円の寄付が集まったと発表した。目標額の1億円を大幅に上回った。動植物や化石などの標本の管理費や返礼品の製作費などにあてる。

資金を募ったCF仲介サービスの運営会社によると、国内のCFでは最高支援額という。支援者は約5万7千人に上り、こちらも国内最多としている。

約4億4千万円を標本の保管や修復などに使うほか、全国の博物館と連携し標本のレプリカを作製する事業などに約1億円を使う。大規模災害時に標本を素早く保存するための資材を各地に備蓄する取り組みも検討する。

寄付金のうち約3億2千万円は、研究者によるオリジナルの図鑑などの返礼品の作製やCFの手数料などにあてる。支援者のうち図鑑を返礼品に選んだ人が約3万人で最多だった。図鑑は制作中で2024年3～4月には支援者に届ける予定だ。

篠田謙一館長は6日、「大変驚いており支援者の方に感謝している。博物館が経営的に危機にあると多くの人に伝わったことが多くのご支援につながったのではないかと話した。その上で「CFは世間に訴える効果は大きいが長続きしない面もある。今後は運営を継続的に支援してくれる賛助会員などを増やしたい」とした。

国立科学博物館は2020年以降、新型コロナウイルス流行の影響で入館料収入が減り、光熱費の高騰も打撃になった。国からの運営費交付金が年々減少傾向にあることも重なり、標本の状態が悪化するなど運営に支障が生じた。

8月上旬に仲介サイト「READYFOR(レディーフォー)」で寄付の募集を始めた

ところ、初日に当初の目標額だった1億円を達成した。その後も寄付を集めて11月5日に終了した。

(「国立科学博物館に寄付9.2億円 クラウドファンディング」『日本経済新聞』2023.11.6朝刊記事より。)

注…クラウドファンディング：主にインターネットを經由して、個人・団体が、企画内容と必要な金額(目標額)を提示し、広く支援や協力を呼び掛ける方法のこと。

**問1** 現代において、さまざまな資料を保全するにあたり、困難な問題に直面することがある。あなたは、その中で、何が最も大きな問題だと考えるか。その理由も含め、200字以内で説明しなさい。(配点30点)

**問2** 1の解答を踏まえ、さまざまな資料を次世代に継承するための営みが抱える課題を解決するためにはどのような方法があるか、あなたの考えを500字以内で述べなさい。(配点70点)

Ⅱ 次のA・Bの文章は、いずれも「歴史を語ること」について述べている。ここで扱われる「歴史」とは、教科書や歴史書などに記録されたものと必ずしも一致するわけではない。二つの文章を読んで、設問に答えなさい。(配点 100 点)

A

以下の文章は、アメリカの歴史学者 Gordon S. Wood の著作に収められた“Narrative History”と題する章からの抜粋である。

No doubt there is always a constructed character to all history writing, but this fabricated\* character seems particularly evident in narrative history. The past, after all, is not a series of stories waiting to be told, as has become more and more apparent in the twentieth century. Jean-Paul Sartre\* in his novel *Nausea*\* had his character Roquentin, who is a historian, suddenly recognize that life is not a story. “Nothing happens while you live,” Roquentin realizes. “The scenery changes, people come in and go out, that’s all.”

There are no beginnings and no endings. Events simply tack on to one another in an interminable, monotonous addition...

But everything changes when you tell about life; it’s a change no one notices: the proof is that people talk about true stories. As if there could possibly be true stories; things happen one way and we tell about them in the opposite sense. You seem to start at the beginning ... and in reality you have started at the end.... The end is there, transforming everything.

Incidents no longer just pile up one upon another; they are drawn together, connected, and given meaning by the ending of the story. The plots, the coherence, and the significance of narratives are always retrospective.

This recognition lies behind the contempt French social historians have for the unique, unconnected events of traditional narrative history. For a historian to emphasize one of these unique events and not another, writes

François Furet\*, he has to assume some connecting plot in the events, that they are going somewhere; he has given them “an ideological meaning.” The ending has to be present in the historian’s mind, transforming everything. A historian selects one event over another because that event presumably “marks some stage in the advent of a political or philosophical ideal—republic, liberty, democracy, reason, and so forth.” Such teleological\* narrative history cannot be truly scientific; it is simply storytelling, not essentially different from fiction.<sup>(1)</sup>

(Wood, Gordon S. *The Purpose of the Past: Reflections on the Uses of History*. Penguin Books, 2009, pp. 52-53. より。改変あり。)

#### 語注

\*fabricate 作り上げる

\*Jean-Paul Sartre ジャン＝ポール・サルトル(フランスの哲学者, 小説家, 劇作家)

\**Nausea* 『嘔吐』(サルトルが1938年に著した小説)

\*François Furet フランソワ・フェレ(フランスの歴史学者)

\*teleological 目的論的な

## B

以下の文章は、「歴史の書き換え」を劇作理念とする、アフリカ系アメリカ人劇作家 Suzan-Lori Parks が記したエッセイからの抜粋である。

Theatre is the place which best allows me to figure out how the world works. What’s going on here. So much of the discussion today in literary criticism by Henry Louis Gates, Jr.\* and others concerns how the African-American literary contribution should be incorporated into the canon\*. The history of Literature is in question. And the history of History is in question too. A play is a blueprint\* of an event: a way of creating and rewriting history through the medium of literature. Since history is a recorded or remembered event, theatre, for me, is the perfect place to “make” history—<sup>(2)</sup>that is, because so much of African-American history has been unrecorded, dismembered\*, washed out, one of my tasks as playwright is to—through literature and the

special strange relationship between theatre and real-life—locate the ancestral burial ground, dig for bones, find bones, hear the bones sing, write it down.

The bones tell us what was, is, will be; and because their song is a play—something that through a production *actually happens*—I'm working theatre like an incubator\* to create “new” historical events. I'm re-mem-bering and staging historical events which, through their happening on stage, are ripe for inclusion in the canon of history. Theatre is an incubator for the creation of historical events—and, as in the case of artificial insemination\*, the baby is no less human.

(Parks, Suzan-Lori. “Possession.” *The America Play and Other Works*. Theatre Communications Group, 1995, pp. 4-5. より。改変あり。)

語注

\*Henry Louis Gates, Jr. ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア(アメリカ合衆国の文学評論家)

\*canon 正典(特定の文学作品群の中で、芸術的価値が認められ、後世に読み継がれるべき作品として権威づけられたもの)

\*blueprint 青写真

\*dismember バラバラにする

\*incubator 人工ふ化器

\*insemination 受精

問1 Aの文章において、筆者が下線部(1)のように述べるのはなぜか。本文の内容に基づき100字以内で説明しなさい。(配点20点)

問2 Bの文章を読み、筆者が持つ「歴史」への認識について説明しなさい。そのうえで、筆者がなぜ下線部(2)を試みるのか、およびどのように下線部(2)を達成しようとしているかについて、本文の内容に基づき150字以内で説明しなさい。(配点30点)

問3 AとBの文章の内容を踏まえ、「歴史を語ること」の意義と問題点について、あなたの考えを300字以内で述べなさい。本文の具体例を交えて論じること。(配点50点)



